

八 日 講 御 書

弘安五年一月七日 六一歳

満月のごとくなるもち^餅二十・かんろのごとくなるせいす一つ、^{清 酒 筒 た}給ひ候ひ了んぬ。春のはじめの御悦びは月のみつるが^満ごとく、しをのさすが^潮ごとく、草のかこむが如く、雨のふるが如しと思し^{おほ め}食すべし。

^{そもそも}抑 八日は各々の御父・釈迦仏の生まれさせ給ひ候ひし日なり。彼日に三十二のふしぎあり。一には一切の草木に花さきみなる。二には大地より一切の宝わきいづ。三には一切の^{田 畑}でんばたに雨ふらずして水わきいづ。四にはよるへんじてひるの如し。五には三千世界に歎きのごゑなし。是くの如く吉瑞の相のみにて候ひし。是より^{このかた}已来今にいたるまで二千二百三十余年が間、吉事には八日をつかひ給ひ候なり。然るに日本国皆釈迦仏を捨てさせ給ひて候に、いかなる過去の善根にてや法華経と釈迦仏とを御信心ありて、各々あつまらせ給ひて八日をくやう申させ給ふのみならず、山中の日蓮に華^香かうををくらせ候やらん、たうとし、たうとし。恐々謹言。

正月七日

日 蓮 花 押

人 々 御 返 事